

雨の日の過ごし方

かえで

雨の日の過ごし方

ノイズのような雨音が、遮光カーテンをひき忘れた薄暗い室内にまで聞こえる。いつの間にか五分早く進んだ時計の針は、九時すこし過ぎを指していた。寝ぼけた頭でこの時間が午前なのか午後なのかを考えた。雨のせいで明るくはないが夜にはない明るさが部屋に広がっている。そしてやっと私は午前九時であることを認識した。

時間を認識したことを契機にいろいろなことを思い出した。今日は平日の火曜日であるということや、一限から授業があるということ、傘をついこの間電車に置き忘れたということ。どれもこれも最悪な事実で、二度寝してしまおうと思ったけれど、すっかり冴えてしまった頭はそれを許してくれない。仕方なしに布団から這い出して、外の様子を確認する。

窓の向こうでは方舟をつくるには値しないほどの雨が、所どころ砕けたアスファルトの地面へと降りそそいでいた。それでも、私から大学へ向かう気力を流してしまうのには十分な降水量だ。流れ出たやる気を補填するように満ちてくるのは、気だるい感情と傘の行方を思う想像力だった。あの傘は今誰かに使われているのだろうか。今日もどこかで誰かの肩を濡らさないように広げられているのだろうか。そんなことを考えていると慈善事業をしたような気になって、なぜか満足してしまった。

けれど、そんな妄想をしても状況はひとつとして好転しない。雨は依然として地面へと叩きつけられて、砕けている。

意識がはっきりとしてくると、湿気を含んで重たくなった髪の毛が気になるようになった。雨の日ほど自分の長い髪を鬱陶しく感じる日はない。いっそのことばっさり切ってしまいたくなる。けれど自分がショートカットが似合わないことを、すでに中学時代に学んでいた。機能性と見た目。大切なのはどちらだろう。

後者を選んだ私は、髪をくくる。心なしか、雨音が強くなったような気がした。

そんな雑音にまぎれるように、携帯電話が振動する音が部屋に響いた。ガラステーブルと携帯電話が織りなす不快な打撃音はすぐ止んで、代わりにランプが明滅を繰り返した。着信ランプは緑色で、大学の友人からのメールであることを示していた。

膝立ちになって、テーブルまで近づいていく。テーブルの上には携帯電話のほかに、夕食に使った食器類が出しっぱなしになっていた。でんぷん質が固まったお茶碗を見て、昨夜の自分を呪う。けれどそれを水に浸す前に、薄暗いこの部屋にはすこし眩しいランプの発生源を手にした。

〈どしたの？〉

たったそれだけの文を送りつけてくる友人に苦笑しつつ、リプライする。

〈寝坊〉

送信してから無愛想過ぎたかと思ったけれど、だとしたら最初に送ってきた友人にも非があるだろうと気にしないことにした。

二文字だけのメールを送信して間もなく、手の中で振動があった。

〈めずらしいね。代返しとく。あとでなんかおごりね〉

三文だけのメール。私たちのメールは他の人に言わせれば、男同士のメールに似ているらしい。受信メールを見直してみれば、女で絵文字などを使っていないのは彼女くらいなものだった。私はメール相手によって絵文字を使ったり使わなかったり。はたしてどっちが先にこんな淡泊

なメールを出し始めたのかは、今となっては思い出せない。けれど、このやり取りが私にとって一番心地が良いのは確かだ。彼女がどう思っているかは分からないけれど。

〈ありがと。おごりはジュース一本で勘弁して〉

このメールに返信はなく、私の願いが聞き届けられたのかは分からなかった。

時計を見ると、起きてから一時間が経っていた。遅めの朝ご飯を食べようにも目の前には使いっぱなしの食器があって、まずはそれを洗わなければならなかった。固まったでんぷんを落とすのが面倒で、水を張った桶に軽く洗った食器をそこに沈めた。

空腹を満たすために、買い置きしてある栄養補助食品を食べた。それほど不味くはないのだけれど、機能性を重視したせいなのかパサパサしていてひどく喉が渇く。食べる前から分かっていたことだけれど、改めて辟易しつつ冷蔵庫の中から、これも買い置きのミネラルウォーターを出して、ボトルのまま口をつけて飲んだ。

飲みきれないボトルのキャップを閉めて、起きてから初めて立ち上がる。腕を伸ばして軽いストレッチをすると、背骨がぽきぽきと乾いた音を立てた。

洗濯物を干そうにも外では依然として雨が降り続いていて、洗濯かごの中では洗剤まみれになるのを待っている洋服が今にも溢れ出そうだ。

いつの間にか梅雨入りしていて、ここしばらく雨の日が続いていた。この時期はどうしても洗濯物が溜まってしまっ嫌になる。乾燥機を置こうにも、独り暮らしのアパートにそんなスペースはなかった。家事というものが、こんなにも天候に左右されるのだということをここ二年で知った。洗濯は当然のように、買い物も車がなければ億劫になる。湿気にだって気を使わなければ、カビの原因になる。けれど、湿気との付き合いは楽器をやっていた分、慣れているかもしれない。それでも、楽器と部屋では規模が違うので頭が痛くなる。

考えるとよけいに頭が痛くなるような気がして、これらの現実から目をそむけた。するとタイミング良く、現実と仮想を行き来するデバイスが振動した。

〈ノートも見せるからあとで学食おごりね〉

まったく、抜け目のないやつ。サボりのお代は五百円くらいになりそうだ。

〈はいはい。ダイエットはいいの？〉

いじわるく、一文を加えて返信する。ダイエットなんて必要ない彼女だけれど、だからこそ言ってみたくなる。どんな反応をするだろう。もしかしたら、こんなメールを彼女にしたのは初めてかもしれない。こんな不思議な気分になっているのは雨のせいかな。だとしたら、一年間のうちで百日くらい私はおかしくなっているのだろうか。そんなことはない信じたいけれど、よく分からない。

〈はいはい三回。あとダイエットならあんたでしょ〉

電波の先では、彼女もおかしくなっているのだろうか。いつもだったら言わないようなくならないこと。なんだ、はいはい三回って。そのくだらなさが、なんだか私の気分も電波に乗って届いたような気がしてうれしかった。

〈はいはいはい！〉

それだけを送って、画面を閉じた。やらなければいけないことが山積していることが、煩わしかった。

申し訳程度に備え付けられたシンクで、食器を洗う。数十分間だけだったけれど水に浸しておいたお茶碗の汚れは落ちやすくなっていた。本当はお湯で洗いたいけれど、ガスの調子が悪いのかなかお湯が出てくれないので仕方なく水で洗っている。どっちの方が非効率だろうかと考えてみるけれど、汚れが落ちてしまえばそんな考えも頭からこぼれ落ちてしまっている。

食器を洗い終えて一息つく。

大学をサボったのに、洗濯という大仕事ができなくて損をしたような気分になる。なにか、気分転換になるようなことはないだろうかと考えてみると、本棚に納められず投げ置かれた数冊の本が目に入る。どれもこれも読みたいと思って買ったのに、最初の数ページしか読んでなかったり、全然読んでいなかったりしている。言い訳をすればここ最近では発表とかがあって忙しかったとかいろいろある。けれどそんな言い訳をしても誰も聞いてくれないし、結局は自分で納得するしかない。

一番手近なところにあった単行本を手にとってみる。タイトルを確認すると、好きな作家の新刊で、やっぱり読みたくて買ったのには間違いなかった。それを読みたくても読めなかったほどの多忙に嘆息する。同時に、今日は引きこもりライフを満喫しようと心に決めて本を開いた。

読書をしている間、意識はどこにあるのだろう。読み終えて時計を見ると、二時間が経っていた。お昼をちょっと過ぎて、十二時半だ。

時刻を認識すると急にのどの渇きと空腹を覚えた。飲みかけのボトルを開けて、水を飲む。生ぬるくなった水はおいしくなくて、のどが渇いてはずなのに、すこしえずいてしまう。

まだ半分ほど残ったボトルを冷蔵庫に入れて、そのついでにお昼になにを食べようか考える。たまご、使いかけの生クリーム、ベーコン、チーズ、ヨーグルト、鶏肉……雑多に入れられた食材。それと、冷凍庫にはエビが入っていることを思い出した。生クリームが心配で、床の上に置かれたトマトの水煮缶も一緒に使ってエビのトマトクリームスパゲティをつくることにした。この料理は姉が高校生のときにバイト先で覚えてきた料理だった。それを得意になって私に教えてくれたのだけれど、その本人はもうレシピを忘れているのだからおかしな話だ。

大きめの鍋に水を張って、火にかける。鍋の外側に垂れた水が、火を不安定に揺らがせる。それも一瞬、赤い炎で蒸発して青い火が鍋を熱し始める。

お湯を沸かしている間に、携帯電話を開く。新着通知はない。連絡を取ってきた友人がたった一人だったことに、すこし心が揺らぐ。そして、明日の会話が容易に想像できてしまう。「昨日はどしたの」とそれほど心配もしていないのに、心配そうに聞かれるのだ。それに私は笑顔で「大丈夫だよ。ありがとう」だなんて言うってしまうのだ。悪いことじゃない。私だってきっと意識もせずにやっちゃっているだろう。だから怖いのだ。心にもないことを人は言えてしまうし、私もその一人だということが。

暗い感情が心を覆ってしまう前に、私は音楽を流すことにした。

料理をするときはいつも、音楽をかける癖がある。曲数でだいたい調理時間が計れるし、それとは関係なしに、気分を明るくしたかった。おいしいものは、暗い感情ではつukれないものだから。

CDをトレイに乗せて飲み込むコンポは、実家から持ってきた、かれこれ十年近く使っているものだ。家を出るのを機に新しいコンポを買おうかと思ったけれど、小さなスピーカから心地良い低音を鳴らしてくれる愛機を手放すことはできなかった。

適当にCDラックから引き抜いたのは、最近大型レコードショップで買ったインディーズバンドのものだった。

雑なマスタリングのせいで、ボーカルはギターの歪んだ音に掻き消されてしまっている。けれど、その攻撃的なリフは今の私にとって気分を高揚させる手助けとなってくれた。

火にかけた鍋の中では沸々と気泡が内側を覆いはじめて、剥離した泡が水面へと浮上して、破裂する。そんなことを幾度も繰り返している沸騰したお湯に塩を入れて、すこしかき混ぜる。湯気立つ鍋の上でスパゲティの乾麺の束を軽くねじって手を離れた。束はきれいに広がって、鍋の

中にスパゲティの花を咲かせた。

熱せられた乾麺はすぐに固さを失って、その全体を湯に沈めた。それを見て、リモコンでコンポを操作する。

Bメロの途中で、強制的に曲が変わる。あいかわらずバランスの取れていない音楽が、メロディを変えて流れ出した。一曲でだいたい四分。これともう一曲でスパゲティはちょうどよく茹で上がるだろう。

スパゲティを茹でているとなりで、もうひとつのコンロにフライパンを乗せて火をつける。フライパンが熱しきらないうちに、その表面にオリーブオイルを適当に垂らす。

ほんのりと香りが漂ってきたところに、トマトの水煮の缶詰を半分だけを加える。水と油が反発して、大きな爆ぜる音を立てた。それもすぐに止んで、トマトの煮える音が聞こえ出す。木ベラでやわらかなトマトの果肉をつぶしていく。中から果汁が溢れだして、線香花火のような音を立てた。そして大きなかたまりがなくなったところで、いったん火を止める。

缶に残ったトマトをタッパーに移して、きっちりとフタを閉める。それを持って、学用品の入ったかばんをあさる。中から付箋紙を出して、今日の日付を書いた。それをフタに貼って、冷蔵庫にしまった。

冷蔵庫を閉めたあたりから音楽はフェードアウトしていき、スパゲティの茹で上がりまであと四分ぐらいであることを教えてくれた。

冷凍のエビをスパゲティの踊る鍋に入れてボイルする。昔はこの行為を手抜きだと思っていたのだけれど、そういうわけではないらしかった。これは姉ではなく、テレビの料理番組で言っていたことだった。

お湯に落とされたエビたちは一瞬で朱色を帯びた。あとはスパゲティの茹で上がりと同時に引き揚げればいい。

再びフライパンも加熱して、気泡がぷくぷくと出てきたところで生クリームをそそぎ込んだ。あまり熱し過ぎないように、弱火にするのを忘れない。

スピーカからはギターソロが奏でられている。聞き覚えのあるフレージングだった。インギーだろうか。この曲をつくった人と私は、同じ音楽を聞いて中学や高校を過ごしたのかもしれない。そんなことは偶然というにはよくある話だ。ましてやインスパイアされたアーティストは世界的なギタリストなのだから。それなのになぜだか親近感が湧いた。プロフィールさえも知らない、たまたま手に取ったインディーズバンド。今度は意識して彼らのCDを探してみようと思った。

もうすこしで茹で上がるスパゲティを引き上げるために、コンロ下の戸棚からトングとざるを出した。なんとなく気になって、とくに汚れていない調理具たちを水洗いをした。

どういうわけか、私は時おり軽度の潔癖症を発症する。日常生活に支障をきたさない程度のも。このことを知っている人もあまりいない。家族だって知らないかもしれない。一時期お風呂が長いことを咎められたけれど、私が二度体を洗っているとは思っていなかっただろう。

けれどこんな微妙な癖を見抜いた友人がいた。なにがきっかけだったのかは、自分にさえも分からない。ただ唐突に「あんた、ちょっと潔癖症みたいなのところあるよね」と言われたのだった。何人かの友人たちと雑談しているときだったから、その言葉は他の友人たちの「それはないよー」という言葉と笑い声で流された。そう言った彼女も「そうかな」と小首を傾げて言うだけで、追及はしてこなかった。ただ本当になんとか言っただけなんだろう。理由を聞こうと思ったけれど、自分が潔癖症であることを認めているみたいで、聞くことはできなかった。

ほんのすこし昔のことを思い出していると、いつの間にか曲が変わっていて、私はあわてて鍋の火を止めた。直後に立ち上る湯気が熱い。それでも怯んではいけない。

トングでスパゲティとエビを掴んでざるに入れる。残り数本になるとなかなか掴めなくて、自分の不器用さが嫌になる。結局、スパゲティ二本を鍋に泳がせたまま、ざるを振ってお湯を切り、その上にオリーブオイルを垂らした。それを菜箸で全体に絡まるようにしてから、すこし煮詰まってしまったソースに入れた。

乳化というものをあまり理解していないのだけれど、塩分を加えるつもりでスパゲティの茹で汁をフライパンにお玉で掬って入れる。スパゲティにソースが絡むように、菜箸で懸命にかき混ぜた。

スパゲティが白みがかかった赤に染まったのを見て、火を止めた。立ち込める香りは、姉の立った実家のキッチンと同じものだ。

シンク脇の洗った食器を重ねたカゴからスパゲティやカレーに使う、底の浅い皿を取り出した。さっき洗ったお茶碗から水が垂れていて、皿のふちがすこし濡れていた。それを布巾で拭いて、スパゲティをよそう。トングで掴んだスパゲティを、手首を使ってぐるりと回してそれらしくする。最後にエビを周りとしてっぺんに乗せて完成だ。

完成した料理とフォークとスプーンを持って、リビングというには狭い部屋のテーブルの前に座った。ついでに冷蔵庫から飲みかけのミネラルウォーターを出す。

料理が終わると途端にロックなナンバーが耳触りになってしまう。気に入ったと思ったばかりのアーティストのCDをトレイから吐き出して、代わりにゴールドベルク変奏曲を流しはじめる。

この曲にはテンポ指示がない。忙しく奏でるピアニストもいれば、終始おだやかに奏でるピアニストもいる。どちらも好きだけれど、食事中はおだやかでいたい。スピーカから流れるゆったりとしたピアノの旋律の中、私はちいさく「いただきます」と言って食事をはじめた。

かちゃかちゃとフォークとスプーンがぶつかり音を立てる。ちいさな頃からこうしてスパゲティを食べてきたけれど、最近インターネットでパスタ全般のレシピを調べていたら、こういう食べ方は外国では幼い子どもがするみたいだった。だからと言ってこの習慣はすぐにはやめられないし、やめる気もなかった。食べやすいし、これを見て眉を顰めるようなイタリア人の友人もない。外国に行ってる間くらいだったらやめるかもしれないけれど、なんて海外に旅行するお金もないのに考えてみた。

エビを食べて、尻尾を皿の縁に並べる。エビはこの尻尾がなければ最高の食材だと常々思う。調理するときに取ってしまえば、出ているのか判然としない出汁を取ることができない。かと言って残しておくとかうして食事のときに面倒だ。いっそのこと尻尾がなければいいのだと、エビの事情も考えずに思ってしまう。それとも、尻尾も食べればいいのだろうかとも考えるけれど、ちらりと皿の縁に鎮座するソースをまとった朱色のそれを見て思いとどまった。うすいプラスチックのような尻尾が口の中にあるような気がして、水を飲んだ。唇を離すと、ボトルの飲み口に口紅のような色がついた。

今さらになって、今日は化粧をしていないことに気づいた。出かけていないのだから当然だし、家の中ではいつもノーメイクだけれど、平日の昼間にファンデーションすらつけていないことに驚いた。高校時代にはなかった、化粧をする習慣。大学に入ってから時間が経って、ずいぶんと化粧にも慣れたはずだったけれど、もしかしたらそうでもないのかもしれない。

口紅のような、でも本当はそんな艶っぽいものではないトマトと生クリームのソースをティッシュで拭いた。

スパゲティを食べ終えて最後のエビを口に入れると、携帯電話が緑色のランプと共に震えだした。

〈もしかして傘なくしてない？〉

エスパーみたいなメールを送ってきた友人に苦笑する。この人には、私はなにも隠すことはできないのかもしれない。なにもかもお見通しの千里眼のような彼女は、今どこでなにをしているのだろう。私には知るすべはない。だから世界中とつながれるEメールで、距離にしてみればイタリアよりも近いところにいる彼女とつながろうと思う。

〈そうだよ電車に置き忘れた。ところで私が今なにしてるか分かる？〉

彼女の千里眼は見抜けるだろうか。きっと分かってしまうのだ。それは確信なのか信頼なのかよく分からない。ただなんとなくそう信じている。

ほどなくして携帯は着信を知らせて、押し黙る。

〈お昼でも食べてるんじゃないの。食べ終わったら駅まで来て〉

時間から予想したのだろうけど、当ててきたことに満足して、にやついてしまう。しかし、駅？ 傘がないことを知っているはずなのに……？

そう思って、彼女の天然ぼけを笑おうとして外を見ると、すでに雨は止んでいた。それによく見るとうっすらと虹が架かっている。

いつからだろう。音楽を流していたせいで、雨音がなくなっていることになんか全然気がつかなかった。ひさしぶりの虹を見せてくれた友人に感謝しつつ、返信する。

〈食べ終わったとこ。今から行く。あ、でも化粧してないや〉

メールを打ちながら思い出したことを書く。さて、どうしようか。そんな迷いを断ち切るように、返事はすぐに来た。

〈私も今日はノーメイク。そもそも高校生のころはしてなかったでしょ〉

大学に行っていたはずの彼女が化粧をしていなかったことに驚きつつも、笑いをこらえることはできなかった。なんなのだろう、彼女は。どうしてこんなにも私を落ち着かせてくれるのか。分からないから、私はもっと彼女と一緒にいたいと願うのかもしれない。ただ今日はちょっと雨に邪魔をされてしまったけれど、この願いは神様か仏様、それとも先祖のおじいちゃん、おばあちゃんに聞き入れられたみたいだ。

〈それじゃすぐ行く〉

適当に出掛けられるような服を着て、ぼさぼさの髪を櫛で整える。さっきまで髪をくくっていた可愛げのない黒いゴムを外して、子どもがするみたいなプラスチックの飾りのついたゴムでくり直す。まだ演奏の終わらないゴールドベルク変奏曲を途中で止めて、ディスクも取らずに電源を切った。それからお財布と携帯を小さめのカバンに入れて、玄関に向かう。家を出る間際、鏡をちらりと見た。

外に出ると太陽は西の地平線へと向かっていて、時間の経過を教えてくれた。まぶしさを目の端に捉えたまま、足早に駅へと向かった。足元の水たまりに移った自分の顔は、笑っていた。そんな水たまりを踏むちいさな子が前方にいた。となりににはちょっと困ったような様子だけれど、やっぱり笑顔で子どもの手を引く母親がいた。

ふと、自分の子どものころを思い出した。黄色いカッパに黄色い長靴。買ってもらったのがうれしくて、雨が待ち遠しかった。けれどそう思っているうち晴天ばかりが続いて、お風呂場でカッパと長靴を着たりした。そんなニセモノの雨じゃ満足できなくて、やっぱり雨の日が恋しかった。見かねた母がてるてる坊主を逆さまに吊るすことを教えてくれた。

一週間は吊るし続けたらどうか、幼い私の頭からは逆さまのてるてる坊主のことなんかすっかり忘れていた。だから雨が降ったときも、黄色い雨具で身を包んだ私はただそれだけがうれしくて仕方がなかった。ひとしきり雨を浴びて満足した私が玄関前で見つけたのは、ぐっしょりと濡れた逆さまのてるてる坊主で、ついさっきまでの楽しかった気持ちは吹き飛んでしまっていた。

雨で濡れなかったはずの顔はびしょびしょになり、てるてる坊主のことを大声で叫んだ。お昼ごはんをつくっていた母は何事かと駆け付けてくれて、雨の滴るカップを着たままの私を抱き上げてくれたのだった。

長靴を履いていない今の私には、となりを通って行ったあの子どものようににはできないけれど、水たまりの端を踏みつけてみた。ちっとも満足できないけれど、大人になりつつある私はがまんをした。大人になることは嫌だとちょっと思う。こうやって、がまんをしなくてはいけないから。

水たまりの数を数えながら、たまに前方の自転車に気づかなくて鈴を鳴らされたりしながら、駅まで歩いた。駅の前では、腕時計を見つめる友人が待ちぼうけしている。釣られて私も腕時計を見ようとする。けれどその視線の先には自分の手首があるだけで、円盤はなかった。やれやれと苦笑しつつ、友人の元へと小走りで向かった。

「ごめん、待った？」

なんて恋人同士がするみたいに。声に反応して彼女はゆっくりと顔を上げて言った。

「予告通りに十分待った」

全然甘ったるくない言葉に、女同士の切なさを一瞬感じてしまう。でもすぐに彼女は笑って話しかけてくれる。

「じゃあ、傘、買いに行こっか」

子どもじゃない私の手を引いてはくれないけれど、彼女は私の隣を歩いてくれる。それだけで、私の心はどんな音楽を聴いているときよりも、どんなおいしい料理を食べているときよりも落ち着いてしまうのだった。